令和６年度　学校関係者評価書

学校園名　附属特別支援学校

1　学校関係者による評価

領域	学校関係者による評価と今後の課題
学校運営	・校務分掌業務のマニュアル化の完成は、素晴らしいです。口頭でもお伝えしましたが、本校では、マニュアルを頼るあまりに、「深く考えずに、理解が不十分なまま、ただ先人の業務をなぞるのに精いっぱい」といった状況に陥る者が若干ではありますが実際に存在しました。御校におかれましては、運用面での OJT 等が適切に行われますよう、期待しております。 ・学校評価アンケート（保護者回答）についてですが、項目 13，14，15 のいずれも、昨年度比で、肯定的な評価（とてもそう思う）の割合が大幅に増加しています。校長先生をはじめとする全教職員の皆さんの日々の努力の結晶として誇れる結果だと受け止めております。 ・教員の業務量の偏り・負担軽減に関する組織的な対応が不可避と感じます。大学本体の予算的リソースの限界や、少子化や若い人の価値観の変化等による採用難が背景にあるため、人員増という方法での対策は現実的ではないと理解しました。となると、現在の業務について効率化・スリム化する以外の方法が見当たりません。教員個人の受け止めの問題として矮小化すると、改善には繋がりません。大学や学校のリソースからできること・できないことはあるとしても、まず、現場の教員と十分な意見交換を行い、学校内で対応できる方策を模索することが必要だと感じます。 ・校務分掌業務マニュアルの作成、リモート会議システムの活用、出席簿の電子ファイル化など、業務のマニュアル化とデジタル活用の推進によって教員の事務作業等の軽減・効率化を進めつつあることは評価できる。その一方で、常勤職員がマイナス５人の体制だったことで、中学部・高等部の教員への負担が過重となり通常の教育活動が難しい場面もあったという事実は、異常事態であったことを示唆している。特に中学部でその傾向が著しかったことは、活動報告での悲痛な訴えから察することができた。教員不足の実情の中でどのように教育の質を低下させないようにするか、部ごとでなく全校的な検討が求められる。 ・大学との連携による各取組み等を行いつつ、業務マニュアル作成や効率化等を検討され、働き方改革に取り組まれていることがわかりました。引き続きの取組を期待いたします。 ・来年度は教員の定数がほぼ確保される見込みであり、今年度、課題となっていた常勤教員の不足による負担増が軽減されることは、大変心強いことです。一方で、お話の中にもあったように、教員の入れ替わりによる業務負担の偏りや、定数確保の難しさは今後も続くことが予想されているため、教員一人ひとりの努力に依存するだけでなく、業務の効率化や質の向上に向けた組織的な取り組みが引き続き求められると感じました。大学の先生方との連携が強化され、さらに他大学との共同プロジェクトが始動していることは、非常に意義のある取り組みだと思います。これにより、知的障害児教育の実践的研究がさらに進展し、研究協議会や研修会等を通じて、日本全国に広く活用されることを期待します。生涯発達支援学校として、同窓生のみならず、地域の知的障害を持つ方々にとっても、学びの場としての役割がますます発展していくことを願っています。
教育活動	・実際に参観させていただいた高等部保健体育についての感想となりますが、基本的な事項である運動量・活動量の確保ができている点と活動内容の個別最適化がなされている点が、とても良いと思いました。（ある研究によると、小学校での体育の 45 分間の授業中、児童の実働時間は 20 分間程度しかないケースが多いそうです。）また、生徒の実態やニーズの把握、指導内容と教材・教具の工夫等が積み重なって、個に応じた指導が実現できていることをもっとアピールしてもよいと思いました。（校内の先生方にと

	っては、当たり前の事なのでしょうけれども。） ・少人数で丁寧な指導がなされていると思います。教員によって教え方にも個人差があると感じました。OJT が効果的だと思いますが、教員の配置に余裕がないので、力量のある教員のスキルが体系的に習得できるような方法があるとベターだと思います。 ・コロナ禍が終息し、昨年度に続いて修学旅行や宿泊研修、他校との交流活動が以前のように積極的に行われ、高等部の現場実習も例年通り実施できたことは喜ばしい。インクルージョンの観点からも、校外での人との関わりや経験を増やすことは重要だと思う。 ・人員体制が厳しい中においても、業務の比重や工夫等を検討しながら個々の生徒にあわせた取組に加え、研究活動にも各学部で取組まれていることと思います。引き続きの活動を期待しております。 ・教員の負担が大きい状況の中でも、各部において研究が着実に進められていることが印象的でした。特に、「見通し→行動→振り返り」の AAR サイクルを活用し、振り返りを核とした学びの方法が実践されている点は、大変優れた取り組みであると感じました。
研究活動	・指導体制等、様々な制約がある中で、附属学校として期待される様々な研究等を推進されていることに、感銘を受けました。また、次年度以降も本校と細く長く、研修や研究面で連携等をさせていただければ幸いです。何卒よろしくお願い申し上げます。 ・他大学との連携による研究は、知見を深めるとともに広報活動にも繋がる者と思います。 ・教員の繁忙感の中でも今年も研究協議会など多様な研究活動が実施されたことは評価に値する。研究協議会では、昨年に引き続き「言語コミュニケーションの支援」をテーマに幼小中高それぞれで設定した言葉の役割に応じた授業実践が報告された。本校ならではの高度で体系的な研究報告となっており、知的障害児教育に大きく寄与するものと思われる。 ・各取組みの内容は今後のより良い教育活動の実施に向けて大変有意義なものと推察いたしますので、引き続き、研究活動の成果を発信、共有いただくような機会を作っていただけると良いと思われます。 ・大学との連携により、より厚みのある研究が進んでいると感じました。生涯発達を支える言語コミュニケーション能力の育成においては（自立や社会参加においても）、基礎的な学力（読み・書き・計算）は基盤となる重要な力であると考えます。そのため、これらの学習時間の確保や、効果的な指導方法の確立が進められることを期待しています。
学生の教育・支援活動	・AI や ICT が、どれだけ進歩しようとも、最後まで人が携わるべき職業の一つが教員だと思います。現職の先生方には、負担もあるかと思いますが、幼児・児童・生徒への指導や支援と同様に、次世代の教員人材の育成は喫緊の課題であることを理解された上で、学生の育成等を進められている点が、とても素晴らしいと感じました。 ・学生の教育実習などを積極的に受け入れていると思います。学生の教育が採用に結び付けられる工夫があるかどうかを次回伺いたいです。 ・介護体験学生の受け入れは今年度も中止となったが、教育実習生や学生参観の受け入れ、研究への協力などで学生の教育支援には大きく貢献したといえる。教職員をめざす学生が減少しているといわれる現状において、学芸大学附属校の役割は極めて大きいといえる。受け入れる教員への負担は少なくないと思われるが、その熱意や支援を必要とする子どもへの向き合い方も含めて学生に伝えることで、次世代を担う教員の養成、特別支援教育を志す学生の育成に今後も務めていただきたい。 ・学生教育への支援に積極的に取組まれているものと思います。 ・多くの教育実習生を受け入れ、国立教員養成大学の附属機関としての役割をしっかりと果たされている点は、大変意義深いことです。
社会貢献	・人的なリソースが限られる中で、最大限の努力をされていると受け止めております。 ・若竹会などの活動は、特別支援教育・在校生・卒業生・社会を繋げる大きな意義があると思いますが、他方で、保護者の個人的なボランティアに頼らざるを得ない点が課

活動	題だと思います。また、教員の先生方の関わり方によっては、事実上部活動に拘束されることと同じ問題を抱えてしまうことが懸念されます。 ・公開講座の実施、各種研究への協力や視察の受け入れなど、学芸大学附属校として広く社会に門戸を開放していると思う。しばらくコロナ禍での中断があったが、行政や地域住民、障害者支援団体などと共催の夕涼み会を今年度開催できたことも、地域貢献として大きく評価できる。こうした普段からの地域との連携が、災害発生時などでの関係各所の連携や避難活動に役立つことになると思われる。 ・公開講座の実施等に加え、研究協力や視察等を多数受けられており地域貢献を意識して取組まれており、引き続きの活動を期待しております。 ・地域との連携や調査研究への協力、幅広い視察の受け入れなど、積極的に社会貢献活動を展開されていることに敬意を表します。
その他	・開校70周年記念式典をはじめとする、諸行事が滞りなく実施されて何よりでした。本校は、まだ開校して４年目の学校ですが、開校10周年を一つの大きな節目と捉え、そこに向けて、あるべき未来の学校像の構築を目指しております。御校のこれまでの道程や今後の姿を追いかけて参る所存ですので、今後ともよろしくお願いいたします。 ・今後も、教育・研究・地域貢献の面でのさらなる発展を心より願っております。

２　評価の実施概要

１）学校関係者評価委員会の開催　　年２回（７月、２月）

第１回　授業参観、施設・設備の観察、
協議（学校の状況、学校経営計画、今年度の重点課題等について）
質疑、評議員からの助言・提言

第２回　授業参観、施設・設備の観察、
協議（学校の状況、今年度の反省等について）
質疑、評議員からの助言・提言

２）学校関係者評価委員会の内容

第１回　令和６年度学校経営計画について
令和５年度保護者アンケートの結果について
令和５年度教員の働き方についてのアンケートについて
令和５年度学校関係者評価書

第２回　学校経営についての今年度の状況・評価、各学部の状況報告
令和６年度第１回学校評議員会協議書のまとめ
令和６年度保護者アンケートの結果について
令和６年度教員の働き方についてのアンケートについて
学校評価の記入依頼

３　学校関係者委員会委員，開催日

１）学校関係者委員会委員（学校評議員）

岩永　　純　　（東京障害者職業センター多摩支所長）
河野　直樹　　（東久留米市さいわい福祉センター所長）
守屋　光輝　　（東京都立東久留米特別支援学校校長）
黒松　百亜　　（晴海協和法律事務所　弁護士）
川村　紀子　　（東京学芸大学附属特別支援学校前ＰＴＡ会長）
堤　　啓介　　（東京学芸大学附属特別支援学校若竹会会長）

小瀬　ますみ　（東久留米市教育委員会指導室参事兼指導室長事務取扱）

２）学校関係者委員会開催日

第１回　令和６年７月１６日（火）

第２回　令和７年２月２５日（火）